

Title	進歩概念の論理的検討:進歩と退歩 : 型Formの意味をめぐって
Sub Title	Examen logique du concept "Progres": Progres et regression : essai sur les fonctions de la forme (Form)
Author	安友, 進(Yasutomo, Susumu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1982
Jtitle	哲學 No.75 (1982. 12) ,p.237- 263
JaLC DOI	
Abstract	Qu'est-ce que le progres ? On croit généralement que le progres est à l'opposé de la regression. Mais J. J. Rousseau dit que le progres était en même temps la regression. La regression est-elle donc nécessaire au progres ? Quelle est la vraie relation entre le progres et la regression ? En premier lieu, est-il vrai que le progres est le contraire de la regression ? S'il est vrai que le progres est à l'opposé de la regression, il n'en resultera pas que le premier soit converti en le dernier, ni vice versa. Cependant la chose se passe ainsi en réalité. Alors de quelle façon et dans quelles conditions le progres est-il converti en la regression, ou vice versa ? Si ces conditions étaient trouvées, ne pourrions-nous pas prendre des mesures contre la regression nécessaire au "progrès" ? D'autre part, ne pourrions-nous pas proposer "le progres dans le sens propre du mot" au lieu du soi-disant progres ?
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000075-0237

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

—型Formの意味をめぐって—

安 友 進*

Examen logique du concept "Progrès"

—Progrès et régression—

essai sur les fonctions de la forme (Form)

Susumu Yasutomo

Qu'est-ce que le progrès?

On croit généralement que le progrès est à l'opposé de la régression. Mais J. J. Rousseau dit que le progrès était en même temps la régression. La régression est-elle donc nécessaire au progrès? Quelle est la vraie relation entre le progrès et la régression? En premier lieu, est-il vrai que le progrès est le contraire de la régression? S'il est vrai que le progrès est à l'opposé de la régression, il n'en résultera pas que le premier soit converti en le dernier, ni vice versa. Cependant la chose se passe ainsi en réalité. Alors de quelle façon et dans quelles conditions le progrès est-il converti en la régression, ou vice versa? Si ces conditions étaient trouvées, ne pourrions-nous pas prendre des mesures contre la régression nécessaire au "prétendu progrès"? D'autre part, ne pourrions-nous pas proposer "le progrès dans le sens propre du mot" au lieu du soi-disant progrès?

* 慶應義塾大学社会学研究科博士課程教育学専攻

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

『家族・私有財産・国家の起源』(F・エンゲルス) の中に於て、古代ローマ都市の市民達が、より原始的な野蛮人達の方へ自分から進んで逃げてゆくことにより、農奴制へ移行したのだというエンゲルスの指摘が存在するのだが、このような——より原始的な社会による・より文明的な社会の支配、というより、後者から前者への移行の歴史的事実をどのように理解すればよいのだろうか。古代ローマ都市は少くともゲルマニア人社会よりは文明的に進んでいたが、より未開のゲルマニア人たちの眼には、都市がエルガストウルム(牢獄)とうつったし、市民にはゲルマニア人たちの侵入が解放、即ち、自由の到来としてうつたというマウレルやクーランジュの指摘を引きながら羽仁五郎が『都市の論理』の中で述べている・歴史的事実の存在——かような事実の論理的解明こそが、「先なるものが後になり、後なるものが先になる。」(『聖書』) というようにジグザグに進む(歴史的) 進歩の論理を明らかにすることになるのだろうし、現代のソヴィエトからのアメリカへの亡命の事実とも本質的に関連した解釈を下すことが可能ともなるのであるまい。

まず結論的に要約するならば、第一に、より良いものはより悪くなり得る構造を論理的にもっているのであるということではないだろうか。

例えば、より良い制度はへたをすると、より一層仕末が悪くなり得るものなのだとということである。

なぜかといえば、制度化なり、定式化なり、成文化なりといったフォルム型の形成が、固定化を生ぜしめ、当の ^{フォルム}型を生み出して來た原動力たる生成運動 (Werden) そのものから離れて相対的に独立し、Werden に対立する存在物 (定在) ^{ダーザイン}と化してしまうからである。これがフォルムの論理であり、フォルムは、フォルムを形成し創造する力——革命的創造的力——によって実現されるが、ひとたびそれが現実の定在 ^{ダーザイン}になるや、フォルムは元の根元的力と相対的に独立して存在し得る為、必然的に形骸化の道をたどる。のみならず、それがさらに、より先へ進もうとする力にとっては、

すぐさま防害的存在物と化し、桎梏に転化し得る。従って、制度化・定(形)式化は、進歩にとって、それが社会的に一般化し、定在となることを介して社会通念化することと不可分離であるという意味に於て、必要ではあるし、有用でもあるが、他面に於て、危険であり、退歩ともなりうるのである。が、いずれにせよ、フォルムの形成は、進歩のダイナミズムにとって本質的なメントだとは言えるであろう。

このことはさらに、進歩の原理的構造にもかかわってくる。即ち、進歩を概念分析する時、進歩とは原理的に相対的退歩と切り離せず、相対的退歩をその裡に潜在的に可能態として孕んでいる運動である、と言えよう。(ex. ルソー：進歩は退歩でもある。) それは構造上、以前のフォルムのもつ原理を自己の裡に アウフヘーベン 揚棄を介して採り込んでいくことに基いての、さらなる他の原理の創造的にして発見的な獲得運動なのである。その場合、新たに獲得された原理は、必然的にその原理自体の要求する新たなフォルムを生み出し、その新たな原理が生むフォルムは、以前の諸々のフォルムのもつ諸原理を、そのフォルム自体の構造の裡に揚棄を介して内在化し包摂してしまっていると考えられる。

例えば、算数に於るツルカメ算と代数によるその処理を比較してみればよい。

『弁証法・いかに学ぶべきか』の中で三浦つとむが指摘している如く、算数によってだと、その都度その都度論理を構築しつつ、考え考え対処してゆかねばならず、非常に頭を論理的に駆使することになる。ところが、代数によって解くと、XとYと置いて後は機械的に処理しさえすれば自動的に答が出て来るから、論理的な頭脳の駆使という点では明らかに劣っており退歩だといえる。しかし、もっとよく考えてみると、代数はそのフォルム自体の裡に算数による処理の裡の論理を既に内在化し、含んでいるのである。従って、代数的操作自体がその形式の裡に既に論理的思考を内包しているからこそ、解く場合に言わば頭を論理的に駆使する必要もなく、

原理がわかつてなくとも機械的に操作することを可能たらしめるのである。簡単明瞭で容易にした点では進歩だが、以前よりも馬鹿を作り出し得るという点では退歩であるといえよう。しかし実はそれ丈でなく、社会的歴史的に数学の歴史を創り出して来た先端の本質的流れをみるならば、明らかに算数から代数へは進歩なのであり、原理的に以前のものが揚棄されている。ところが現実の個々の人間に於てをとれば、前述の如き二面性を明らかに有していると思われる所以である。

その場合、与えられた当面の社会に於る主体たる諸個人に於て、かような相対的退歩を何とか出来ぬかといえば、しようと思えば出来るのではあるまいか。つまり、諸個人が例えれば、代数自体のフォルムの裡に隠されている論理構造を正しく把握して、フォルムの内実を充実する努力を積めばよいのである。そのフォルムの裡にぎっしり詰っている内実たる思考過程——それは代数を生み出した歴史的過程（個人的並びに社会的な意味での）をも代表している——を理解（= ^{フォルム} 型 の内実の充実化）したうえで、そのフォルムを使用する場合にのみ、前述の相対的退歩が現実のものとなることを避けることができるだろう。この時にはじめて、^{フォルム} 型 は空虚な機械的操作や弄びの対象で無く、歴史的背景を伴った深い意味のあるものとなり得る。

とはいって、かような社会歴史的過程の理解が、同時に、彼なりの発見的創造的な個人史的理解でもなければならない。そうであってこそ、たとえ既存の型に関してであっても、其處には彼なりの型の発見と創造が生じ得、例えれば型が今、既存の言葉や概念だとした場合、それらの所与の言葉や概念に振り回された使い方（小林秀雄のいう「概念の弄び」）ではなく、社会歴史的に裏づけられつつも、それ以上に自分なりの独自の意味をこめてそれらを使えるようになるであろう。その時、彼は最早、単に既存の言葉（型）を使っているのではなく、いわば言葉（型）を彼なりに新たに発見し生み出しているといえるのである。J. Piaget が、Comprendre, c'

est inventer. (理解するとは、発見することである。) と言っているのは、けだし至言である。発見的な個人史的理解に媒介されることによって、はじめてその言葉(型)は、社会的でありながらも個人的であり得、しかも、個人性と社会性とが両者の歴史性を含みつつ発展的に統一されていくことになるのである。

しかし、注意すべきは、このことが、同時に、——社会歴史的に生み出されて来た^{フォルム}型の側からみると、——この^{フォルム}型自身が「みずから自己意識をもつようになり、自分の生成と自分への反省的復帰運動とを生み出す」(Hegel,『精神現象学』)に至るようになる側面を有しているという点である。即ち、諸個人が、^{フォルム}型が生み出されて来た歴史的プロセスの把握と、新たな発見的創造的な・彼なりの個人史的理解とを媒介として、^{フォルム}型を批判的に攝取するようになるという運動の側面は、同時にまた、^{フォルム}型それ自身が、(科学の論理の如き批判的自己超克の原理と方法論とを、自己的なものとして取り込み、内在化してゆくプロセスを伴いながら)、発展的な主体性の獲得運動を形成していくという、別の側面の運動を生み出すことでもあるのであって、それら両面性を有した Bildung の運動が、相互作用的に、全体としての歴史的進歩のダイナミズムを形成していくことになるのである。

いずれにもせよ、こうしたことは物理(法則)に於る定理などや、数学の公式に限らず、言語でも制度でも、あるいは、武道などに於る基本型でも、およそフォルム化しているもの総てについて妥当する本質的な事柄なのだとと言えよう。

さて、ここで再確認しておかねばならないことは、《型 Form の形成が、進歩のダイナミズムにとって本質的なモメントである。》ということである。Hegel は「Form 自体が Wesen にとって本質的なものである。」と言う(『精神現象学』)し、Bollnow も生と形式に関して「形式なくして

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

は生は本質なきままに流れ去る」（『問い合わせの教育』）と述べている。

ここに至って、我々は、進歩と退歩に関連しての型 Form のもつ意味を改めて吟味することが要請されることになる。

そこで、進歩のダイナミズムに於て、型（フォルム）の果す・機能と反機能について、検討してみることにしよう。

まず、型（Form）のもつ反機能に関しては、フォルムがそのフォルムを生み出して來た進歩の生成運動（Werden）のダイナミズムから切り離され（=社会的歴史性の捨象），我々個々人による、彼なりの発見・創造という主体的な実践に基づいた個人史的過程が介在しないで（=個々人による主体的歴史性の不在），^{フォルム}型それ自体として歴史的内実から遊離し、独立した定在として絶対化して把握される（=固定化）時、Formalismus（形式=公式主義），従ってまた権威主義が生じ、それが進歩のダイナミズムの形骸化、即ち定在としての型が進歩のダイナミズムにスリ替ることを介して、堕落、あるいは退歩、あるいは反動へと導くことにもなるのである。

このことを順次、個々の事例を挙げつつ示してみよう。

（I）^{フォルム}型は社会的歴史性の捨象化をもたらしうる：

例えば、戦後民主主義制度が、そのフォルムを生み出して來た歴史的背景を捨象される時、我々はその民主主義制度というものが、戦争という大きな犠牲を払って初めて獲得したものであるという点を忘れてしまい易いのである。それ故、再び同じ歴史的失敗に陥る危険性もそれ丈増えてくるといえよう。（註）

（註）かつて首相であったA級戦犯を中心とする最近の「自主」憲法制定の動きをみると、ロマン・ローランが『ミケランジェロの生涯』の中で「彼の天稟の作品を享受するわれわれは、われわれの祖先がかちえたものを享受する時と同じ態度をとっている。そこに流された血のことをもう考えていない。」と述べているのは、決して他人事ではないのである。今の平和憲法は、戦時中、日本の侵略戦

争に反対を唱えて闘っていた人々にとっては、自分達を解放した仲間(パイザ)(注)の協力と指導による自主的憲法だと思えるであろうが、戦争反対を唱えていなかった者達にとっては、逆に自分達を抑圧支配した者からの押しつけ憲法だとしか思えぬことだろう。「日本の悲劇、それは戦争に敗れたことではない。それは戦争責任が自覚されないところにある。」(武谷三男『著作集6』)。実際のところ、我々日本人は自分たちの犯した対外侵略戦争の歴史的事実を主体的に受けとめ、我々自身の戦争責任を、被害国人民に対する心の痛みとともに、自主的に自己批判することがまず先決ではないのだろうか。かような加害者意識にもとづいた自主的自己批判を欠くとき、そこに主張される「自主」憲法の『自主性』は、容易に正反対物に転化しうるのである。

「戦時に国民ははたして戦争に批判的だったのかという問題を、ここであらためて考えてみなければならない。……戦争反省というのは、中国にあやまるだけが能ではない。……日本国民は自分のために戦争反省をしなければならない。つまり、再び加害者になりたくないという反省をすることである。……被害者にあやまるのは当然ではあるが、それでことがすむのではない。むしろ、いかにして再び加害者にならないかという反省こそが、ファシズムを未然に防ぐということではないか。」(武谷三男『現代論集(6)』)

Non vi si pensa quanto sangue costa.—Dante
(いくばくの血ながれしや 思いはかられず —ダンテ)

(II) フォルム 型 は、個々人による主体的発見・創造・探究活動の不在をもらしうる：

個人主体としての実践活動が、彼なりの発見、彼なりの創造、彼なりの探究として介在せぬ限り、既存の フォルム 型 は、彼にとって生き生きとした具体的意味や、探究の苦しみを伴う面白さや、生の充実感をもたらさず、味気の無いものとなる。

たとえ同一の楽譜からでも、指揮者や演奏家は無限に多様な音楽的豊かさを芸術的に表現する。其処に、彼なりの発見と探究の過程が常に介在し

(注)パイザの思想に関しては、羽仁五郎『自伝的戦後史』、久野収「戦後民主主義の中の羽仁五郎」(『羽仁五郎戦後著作集Ⅲ文化論』解説)、武谷三男『科学者の社会的責任』などを参照。

ているからこそではないだろうか。同様に、もし、大人にとっては既知の自然法則であっても、子供による、彼なりの発見と探究活動によって媒介されていないのならば、どうしてその法則の学習が感動的で面白い・充実感に満ちた・しかも彼自身のものであり得るだろうか。

その意味でも例えば、武谷三男の次の言葉に我々は注目する必要があるのではないだろうか。——「子どもっていうのは、自然法則のなかで、子どもでなくて皆さんもみんなそうですけれども、自然法則のなかで生活しているんですね。ですから、いろいろ自分の体でひっくり返ったりすることなど、それでみんな、自然法則を体得しつつある。毎日毎日が自然法則のなかで生きている。ですから、体得しつつあるということだと、私は思うんですね。」

したがって、それを体得する時に常に、発見というものがある。その発見は、なにも子どもが発見したことが科学に寄与するという意味じゃありませんけれども、しかし、そういう発見ということを大事に育てていくことだろうと思うのです。この発見の中にはもちろん芸術的な発見もあるし、科学的な発見もあるというような、新鮮な発見ですね。子どもの生活はそれの連続である。」

「古いものを継承するというのは、なまはんかなことではできない、まねごとではできないということです。つまりゼロから出発するということですね。そういう考え方というものがいつも必要です。われわれは毎日ゼロから出発するつもりでやってこないと、新鮮なものというのはできないということです。ゼロから出発すればなにもいらないんじゃないのか、勉強なんかやめたという人がいるかもしれませんけれども、そうではない。自分がどうせ人類が知っていることを勉強するんでも、自分がそれを発見していく。それは追体験なんていうものではぜんぜんないんですね。自分というものでそれを発見していく。たとえばレオナルドの絵を見る時でもそれは一つの僕として見るならば、僕の発見なんですね、それは僕が見た

ということはほかの人が見たとはまるで違うことだろうと思うのですね。歴史上、いろんな人がレオナルドの絵を見たけれども、それは僕がこの瞬間に見たというものは違う感覚で見ているということだろうと思うのです。自分は自分の見方があるということですね。それが発見というものだと私は考えるんですね。」（武谷三男『現代論集』第7巻）

まさしく「すべての思考は探究であり、しかも、すべての探究は、その人が今なお探し求めているものを世間の他の人はだれでもが既に確実に知っているとしても、その探究を行なっているその人にとっては、^{ネイティヴ}自・産のものなものであり、^{オリジナル}独創的なものなのである。」（デューイ『民主主義と教育』）

このような・その子供なりの発見・創造・探究活動が介在しない時、即ち、暗記的に押えつけられる時、彼の下す判断と行為の選択は、現存の社会的価値の客体的^{フォルム}型の中に絶えず吸い込まれていく為、そこでは『独立性』や『変革志向性』や『冒険心』は勿論のこと、『主体性』の発達が萎縮し、自己への『責任感』が、構造的にみて、育ちにくくなるのである。評価の基準は、彼を離れて外側に^{フォルム}型として《与えられる》ため、彼なりの主体的実践活動に必然的に付随すべき、成功と失敗、殊に失敗を、まぎれもない自己のものとして引き受けられなくなるからである。従って、その限りでの悪を《自分の内に》受けとめるよりも育たないであろう。勿論、成功だとて同じことなのであって、行為の結果は、決して彼のものとしての成功たり得なくなるのである。彼なりの評価と判断に基づく行為の選択と、彼自身による実践への決断を欠いたところでの、結果としての成功（良いもの）は、主体性の発達・成長の尺度でみる限り、かえってマイナス材料（悪いもの）であり得る。そこには、立派な人間の言葉をしゃべるオオムは育っても、たとえ拙なくとも自分の言葉をしゃべる『人間』は育ち得なくなるであろう。羽仁五郎は「真理を語ることと、真理を口まねすることとは、決して同じではない。誰の口から出ても真理は真理だなど

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

というが、……口まねされたる真理は、いまだかつて真理であったことはない」と語った。没主体的な先走りは、「否定的なものを如何に自身で否定し返して来たか」（吉野源三郎）という、彼自身による Negativität の媒介活動を欠いているものである限り、逆もどりに終る可能性を常に孕んでいる（=先なるものが後になる）ものなのである。

逆に、彼自身による選択に基づく実践活動である場合には、たとえ結果としては失敗であり、その限りでは悪いものであったにしても、没主体的先走りによる成功、また、その限りでの良いものよりは、主体性の点に関しては、より進んだものだと言える（=後なるものが先になる）のである。そればかりでなく、失敗が真に主体的なものである場合には、結果の責任を受けとめ、今後にそれを活かしてゆくことを媒介的契機として、否定的により高まったレベルに於ての・より一層主体的たらんとする姿勢努力につながり得るということを考えるならば、没主体的成功よりは、むしろ主体的失敗の方が、これから先のさらなる実践の成功と真実の道に向かって、一層努力しつつ進んでいこうとしているものだとみなせるのであり、従って今後は、もっと豊富でより良い諸結果をもたらし得る可能性もそれ丈多く有しているものなのだと言えるであろう。

さて、以上の如き観点から“失敗”が考察される場合、“主体的に生きる”とは、一体何であろうか。

失敗は、主体性との関係で、どのように位置づけられるのだろうか。自覺的・自主的に、自らの行動に対して自分で責任をとる生き方——これは現実には、どのような具体的心境・^{なま}生の気持として現象するのだろうか。何も小むずかしい言葉は要らないようと思われる。

——自分の責任で失敗したい——ということではないのだろうか。

わたしは、失敗を、主体性との関係で、上のように位置づけたいと思うのである。

実際のところ、《自分の責任で失敗する》ことすら出来ないでいて、ど

うして人生が自己の“充実”として生きられることができようか。失敗を自己のものとして受けとめられぬ時、彼の人生は、その分だけ自己の“空白”を意味することになるばかりでなく、人生に於る失敗の深い意味を学べない分だけ、『空虚に』人生を終えることにつながるであろう。

もし、失敗（挫折）を自己のものとして受けとめるということに、深い意味が有り得ないのだとしたならば、どうしてJ・ギットンは次のような言葉を吐くことができたのだろうか。そして又、彼が引用しているような文句をどうしてシモース・ウェイユは書けたりするのだろうか。

（ギットン）「生徒の中には、一心に自習しても、どうしても理解できないで絶望する少年もある。長いことかかって勉強した後に答案をまちがえる少年もある。先生から理解してもらえない少年もある。しかし、これらの誰もが、人生を学ぶのである。」

（シモース・ウェイユ）「ほんとうに一心になって幾何の問題を一題解こうとし、一時間後に、初めの時以上に少しも進歩しなかったとしても、そのあいだの毎分のうちに、幾何学とは全くちがった、もっと神秘的な次元において刻々と進歩したのである。自分では感じられず、知ることができないが、この外見的には空しかった努力は、魂のうちにいっそう多くの光を与えたのである。この努力の実りは、いつか後になって、おそらく祈りをするときに見い出されるであろう。また、恐らく当の幾何学とは全く縁のない、なんらかの知性の働きの分野で、この努力の成果が發揮されるであろう。……アルスの司祭〔聖ヴィアンネ〕はラテン語が不得手で長い間これをおぼえようと苦しい勉強をつづけた。そして、この空しい努力は、告白に来た信者の心を見抜き、その言葉の背後のもの、また、信者が隠して言わないことまで見破るという不思議な能力として実を結んだ。」（J・ギットン『読書・思索・文章』）

ここに引用したギットンとウェイユの二人に共通するものとして、失敗を不斷に栄養物に転化して生きる時にのみ可能な・H・Begson流の“總体

的経験” (*l'expérience intégrale*) を生きる姿勢が読みとられないであろうか。

自己の失敗を、他の誰れのでもなく、まぎれもない自己のものとして、誤魔化すことなく受けとめる基本的姿勢、——そこから今度は、他者の失敗や社会歴史上の失敗をも、無縁なこと、他所ごととして自分から切り離して安心するのではなく、《自分にも充分あり得ること》，つまり自分の問題として受け容れられる丈のゆとりも生じ得るのである。この時はじめて、「徐々に、そして社会的共感の成長によって視野を拡大するにつれて、はじめて、思考は、われわれの直接的な関心を超えたところにあるものを含むまでに発達するのである。」(デューイ『民主主義と教育』)という言葉にも深みと重みが加わり得ることになる。自分自身の裡に自己の失敗を引き受けることを欠くところには、「犯人を特別な人間として安心する」といった「茶の間の思考」(『よみうり寸評』1981, 1. 21) 態度が生じて来て何の不思議があるだろう。「特別な人間」でない筈の普通の自分が、今次の大戦で、直接間接に殺人行為に加わって「犯人」とならなかつたとしてもいうのであろうか。

このような「茶の間の思考」現象の背景として認められるのは、「自らの悪を自分で引き受ける余裕」(秋山さと子) をもたらしうる筈の《失敗の合理的な位置づけ》(失敗の正当化ではない!) が欠如しているということなのである。殊に、教育的観点からみると、子供による殺人や暴力が相次ぐ昨今、失敗をいたずらに排除しようとするのではなく、むしろ逆に、失敗を合理的に位置づける方向への努力を積み重ねてゆくところから、教育は出直さなければいけないのでないだろうか。失敗の合理的な位置づけを含みつつの出発——今までの教育にはこれが欠けているように思われるるのである。

そもそも、子どもは実践する限り、元来、『不斷に失敗からも学んで來ている』ものなのである。ところが、成功が失敗と形式論理的に切り離さ

れ、成功そのものとして、ひたすら肯定される一方、他方では逆に、失敗が無駄なものとして、もっぱら否定と排斥の対象となって遠ざけられる丈の、今の教育実践によって、《自分で失敗する》ことから疎外される子どもは、元々もっていた、彼の《失敗からも学んでゆく姿勢》を摘みとられ、押し潰されてゆくのである。従って、かような教育実践の影響の下に育つて来た者の一人によつて、今頃になって態々、元々から存在していたはずの『失敗からも学ぶ姿勢』を、改めて自覚し身につける必要があるのだと主張されねばならぬくらいにまでも、我々は失敗を疎外し、失敗からも又疎外されて来ているのである。

我々による『失敗の疎外』は、子供の『失敗からの疎外』をもたらし、従つて又、子供にとっては本源的な『失敗からも学ぶ姿勢』からの疎外をさらに生み出すのであって、その往き着く先は、無用な失敗への永劫回帰と同じ失敗の再生産でしかないのである。

我々はここで、Hegel を想い起さないであろうか。彼は、否定的なものを肯定的なものから締め出してしまわずに、主体の責極的な契機としてとらえる。——「精神は、自分自身が完全に引き裂かれたなかにあってこそ、自分の真理を獲得する。精神がこうした偉力であり得るのは、それが、否定的なものから眼をそむけるという意味での肯定的なものであるからではない。つまり、我々が何か或るものについて、これはつまらないものだとか、まちがっているとかと言つて、もうそれでそのことは片づいて済んでしまったのだとして、次に別のものへと移つてゆく、といったような場合のことなのではない。そうではなくて、精神がこうした偉力であり得るのは、それが否定的なものを直視し、否定的なもののもとに身を置くが故に他ならないのである。こうして否定的なもののもとに身を置くことが、その否定的なものを活きた存在 (das Sein) へと転ずる魔法の力なのである。」(『精神現象学』)。

我々が、失敗をいたずらに遠ざけ、排除し、形式論理的に失敗を疎外し

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

続けていく限り、そのような『失敗の疎外』に立脚した教育実践は、ますます教育の疎外と教育の失敗を生み出していくことだろう。

これまでの教育の失敗とは、人間実践にとって本質的なものである失敗を疎外して来たことの一現象形態なのである。言い換るならば、『疎外された失敗』あるいは『失敗の疎外』が、『疎外された教育』あるいは『教育の疎外』を生み出し、前者が後者として現象しているのである。

教育実践が本来的なものとなるためには、教育実践も人間実践の一部分である以上は、失敗が人間実践に於て本質的なものとして正当に位置づけられていなければならないのである。

そこでまず、人間実践にとって本質的な《失敗の合理的位置づけ》とは、——現実との媒体たる失敗を、より人間的に成長発達するための、否定的に高まる変革的モメントとして位置づけることである——と規定しておきたい。

しかし、かような・人間実践にとって本質的な・失敗の合理的位置づけの規定は、如何様な理拠に基づいてなされ得るのか。

ここに於て、我々は、人間的成长・発達の“^{モメント}契機”を、実践結果をめぐって、論理的に検討せねばならなくなる。

そこで、次の問い合わせから始めることにしよう。如何なる媒介活動を介して、人間は歴史的に人間となり、より人間的に成長発達して來たのであるか？

我々の答はこうである。——“技術(的人間実践)”を介することによってである。人間と(社会歴史を含めての)自然とを媒介する“技術的実践”が、人間が人間になること、人間がより人間的になり、人間へと歴史的に成長・発達してゆくことを可能にして來たのである。

実は、私は、武谷三男氏の「技術論」に基いて、上の如き答をなす立場をとるに至ったのであるが、ここで彼が技術について語るところを聞いてみることにしよう。

武谷は、「私の技術論は、人間の実践……それをいかに可能にしているか」ということが、技術の根本でなければならないというところからはじまる」のだと言う(『現代技術の構造』)。又、別の箇所に於ては、「技術は実践概念である。……それゆえ実践の原理につき考える必要がある。」(「技術論」,『弁証法の諸問題』)と述べ、さらに武谷技術論は、人間の「実践を内面から、その実践がいかにして可能であり、いかにして行なわれるかについて、その原理についてみる」ものであると言う。

このことを見ても判るように、武谷氏の技術概念は、科学の応用とか適用と考えられている普通の技術概念とは明らかに異ったものなのであり、むしろ後者を含んでの・人間実践一般を可能たらしめている「原理についてみる」ものなのである。だからこそ、次のような主張も出て来うことになる。即ち、——「外界に対する人間の行為は、多かれ少なかれ技術的でなければうまくいかないといえる。……人間が人間以外の動物から人間になったというところまでさかのぼれば、技術によってなったんだということです。……人間の言語そのものも発生においては技術の一部分だった。」(『現代技術の構造』)

つまり、武谷三男の技術論は、——古田光が「科学基礎論としての『技術論』=『実践論』」という論文の中で指摘しているように、——人間の「道徳的実践そのものも本来……技術的な行為」だとして技術論の中に含みうるような、「人間の『実践』の一般的な原理・原型の把握がめざされ」(武谷編,『自然科学概論』第2巻) ているものなのである。

以上のことを見て、さらに武谷氏の言うところをきいてみることにしよう。——「人間の実践というものの内で、技術的行為というものは客観的なものだ……。客観的な自然というものをつかまえて、それで行為というものが起るんですから、したがって、客観的な法則性というものがないと人間の実践などということは可能ではない。だから、客観的な法則性を意識的に適用するということです。それは科学の適用じゃないんです

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

ね。もっと発達して近代になれば、はじめて科学の適用になるんだということです。はじめは客観的な法則性が、とにもかくにあるんだということを、それを意識して、それで行為に適用していく、自分の目的を達成するということです。

したがって、意識の発生、ことばの発生というものが、全部技術の発生、人間社会の発生と一緒になる。技術というのは社会的なもので実さい労働は初めから社会的に行なわれる点でもそうです。これに対して技能というものは、筋肉の感覚とか、個人的なものです。技術というのは伝承が可能である。人から人へと、しかも伝承することによって発展していくことが可能だ。それは客観的社会的だからだ。」（『現代技術の構造』）

さらに、「労働とは技術と技能の統一において実現されるのであります。すなわち、一定の技術には一定の技能が必然的に存在して、労働を実現することになりますが、しかし、技術の立場というものは常に、主観的個人的な技能を、客観的な技術に解消して行く事にあります。しかし、解消される事によって技能が消失するものであるかというのに決してしからず、新たな技術には新たな技能が要求され、これがまた再度技術に解消されながら発展していくという弁証法的関係をとるのであります。」（「技術論」、『弁証法の諸問題』）。そして、「我々の生産的実践は、人間の自然に対する働きかけなのであり、この実践は自然の法則性の場において行なわれ、自然の法則性がこの実践を保証する」（「自然の論理について」、同書）のだという。ところで、一般動物の行動も自然の法則性を基盤として成立しており、法則性の適用だといえどいえるのだが、それは「何ら人間の生産的実践を意味するものではない」のだし、その行為は本能的なものであることをその本質とし、「本能は個体から個体に遺伝によってのみ伝承されるものであり、本質的に無意識なる事をもってその特徴とする」もの故、無意識的なものにすぎないのである。それに対して、「人間の行動の特徴は……客観的法則性を意識し、これを実践に意識的に適用する事にある。」

(「技術論」とする。*

☆Hegel が『精神現象学』の中で、「理性とは合目的的な行為である」と述べているのは周知の通りであるが、Marx の方は、《Das Kapital》の中で、人間に固有な行為としての労働に関連しつつ、次の様に言う——「労働とは、まず人間と自然との間の一つの過程、つまり人間が、人間と自然との質料変換を、人間自身の行為によって媒介し、規則だて、統制する一過程である。人間は自然的質料そのものに対して自然的力として対峙する。人間は彼の身体性に所属している自然的諸力である腕と足、頭と手を働かせて、自然質料を自己の生活の為に使用し得る形態で自らのものとする。人間はこの働きによって、彼の外にある自然に働きかけ、自然を変ぜしめることによって、同時に自分自身の自然をも変ぜしめる。人間は自らの自然のうちにまどろんでいる潜在力を発展させ、自分自身の自然の諸力の活動を、自分自身の主権支配の下におくのである。…我々は労働を、それがもっぱら人間にのみ所属しているような形態で想定する。……(人間にあっては) 労働過程の終局には、その端初において既に労働者の表象の中に、従って既に観念的に現存していた一つの成果が出現するのである。彼は単に自然的なものの形態変化をひき起す丈ではない。彼は同時に自然的なものにおいて自分の目的を、つまり自分の知っている・自分の行為の様式と仕方を法則として規定している・そして又自分の意志をそれに従わざねばならない・目的を実現するのである。しかもこの従属は単独的行為ではない。働く諸器官の労苦のほかに、合目的的な意志が労働の全期間にわたって必要とされ、その意志は注意力として発現するのである。……」

武谷三男は、これらを受けて、「技術的実践は計画的であり、目的意識的であることを本質とする」(「技術論」)ことを示すものだとしつつ、技術の唯物弁証法的規定として、——「技術とは、人間実践(生産的実践)に於る客觀的法則性の意識的適用である。」——としたのであった。

ところで、この技術的(=人間的)実践を、先程の私の問題意識[=人間実践に於る失敗(成功)の位置づけ]に引きつけつつ改めて考察してみる時、かような技術的(=人間的)実践は、その実践に伴う・過程的結果としての「成功と失敗」を本質的モメントとして、それらモメントに媒介

されつつ発展的に成立していくものであると考えられよう。

ところで、既に述べた通り、人間の人間的成長・発達を媒介する活動が、技術（的実践）であった。ところが今、その技術的実践自体に於る本質的メントとして、「成功と失敗」の介在が認められるのだとする時、技術的実践それ自体のうちに於る「成功と失敗」を、人間がより人間的に成長発達して行く際の媒介活動の媒介的メントとして、つまり、より本質的なメントとして、つかめる可能性が生じてくることになるであろう。即ち、技術的実践の本質的メントたる「成功と失敗」の介在を、人間的成长・発達の本質的メントとして把握することが可能ともなり、又必要ともなることになろう。

そこで、次に、——何故、実践結果（成功と失敗）が、人間的成长・発達にとっての本質的メントたり得るのか——その根拠について、以下でより詳細に検討してみなければならなくなるであろう。それ故、我々がなぜ「成功と失敗」（=過程的結果）を、人間的成长・発達の契機としてつかむ必要並びに理拠が有るのか、ということを次に考察してみることにしよう。

さて、先ず Hegel の人間觀の一つ（だと私が考える）——人間は自由を求める=人間はより自由であろうとする——という事との関係において、行為の結果（成功と失敗）の位置を考察しておくことにしよう。

いま、人間実践に於る成功と失敗を、上述の「人間がより自由であろうとする存在である」という人間觀との係わりに於てとらえてみる時、人間は、人間実践に於て「成功への自由を求める」と共に「失敗からの自由をも求める」と表現できよう。しかし、成功への自由の努力は、失敗からの自由への不断の努力を基盤として後者を含んでのみ可能なのである。従って、失敗からの自由への努力が、さらなる成功への自由の努力にとって不可欠だとするならば、ここに於ても、実践の結果が重要な意味をもつてくることになるのである。即ち、失敗からの自由を含んでの、さらなる成功

への自由の努力（＝人間的自由への実践と呼ぶ）に於ける《結果の位置》の問題がクローズ・アップされて出て来るに至る。

人間的自由への実践に於る『結果』が、人間実践そのものの論理構造の中に於て明確に位置づけられておらぬ限り、従ってまた、実践主体が自己的実践結果をありのままに受けとめ、誤魔化しなく意識化するという契機が、当の人間実践そのものの論理の裡に組み込まれているのでない限りは、かような人間的自由への実践は、決して自然の「必然性の洞察」（ヘーゲル）に基づいた、「世界を変革」（マルクス）し得るものとはなり得ないのである。従って、上の如き客体的契機を欠いた・かような自由への実践は、より自由であろうとする・自由への単なる意志の発露にとどまり得る丈ではなく、自由への意志と努力がそれ自体として外的自然から相対的に独立し、主体内部に於ける自己回転運動とそれに伴う不幸な自己充足感に転化する可能性を不斷に孕むのである。（『不幸な意識』！ヘーゲル）

かのような転化の危険性は、倫理的実践に於ても現われ得る。

善き生への意志が生み出す倫理的行為に於て、その行為の客観的結果と、その結果に対する誤魔化しのない自覚が倫理的行為自体の論理の裡に含まれているのでなければ、善き生への意志と努力が、より善き生へと変革的に高まるための現実的メント（「客体的」＝「主体的」契機）を、主体が獲得し得べくもないであって、かような現実的変革の契機を欠く場合、かの倫理的生の努力は、そのつもりが無くとも、単なる『心 情 倫 理』（マックス・ヴェーバー）へと転化してしまう可能性を常に孕んでいるのである。

総じて、『行為の結果』こそが、客体を主体へと媒介するただ一つの契機なのであり、主体は自己の行為の結果を介してのみ、より善き生へと変革的に高まる現実的メントを得ることができるのである。その意味で、結果を、より善き生への意志とその実現努力としての倫理的実践とにとつて、変革的に高まるための本質的なメントなのだとして明確に意識的に

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

位置づけない限り、善き生への努力そのものが、その努力の故に、自己満足をもたらす“快”へと無自覚の裡に転化してしまう虞なしとしないのである。それ故、單なる心情倫理に陥らぬ為には、倫理学は、実践と実践の客観的結果との内的連関（＝実践に於る・変革の本質的モメントとしての・結果のもつ位置）を明確に有していなければならぬといえるのである。

さて、自由への人間実践に於ても、又、善への人間実践に於ても、実践の客観的結果が、それぞれの実践にとっての変革の本質的モメントを構成している点が指摘された訳であるが、いずれの実践も人間実践の特殊形態である以上は、それらに共通な人間的実践一般に於ける・実践結果の位置を、人間を含めての自然一般の裡に於て考察してみる必要が生じてくるであろう。

そこで、改めて、人間的実践一般としての技術的実践を、実践と実践結果との関係に於ける、結果のもつ位置と意味の点からみてみることにしよう。

技術的実践とは、自然の裡に於ける・実体と実体との間の相互作用の一種に他ならないのであり、それ自体が客体でもある実体としての主体（人間）が、実体としての客体（自然）に対峙し、前者が後者の裡の客観的法則性（＝心然性）を意識して、それを実践に於いて意識的に適用する活動（＝自由の獲得）なのである。

ところで、技術的実践に於ける結果（＝実践の成功と失敗）とは、既知の・出来上がった型にはめこむ、いわば《jeu de patience》（H. Bergson）を意味するものではない。かような、はめ絵ゲーム的な完成品を基準にした意味での、スタティックで固定的な、成功と失敗では決してないのである。むしろそれは、主体が、次第次第に、より正しく、より確實で、より大きな必然性、従って法則性の意識化と、その法則性の意識的適用を介して、より大きな自由の獲得へと至るべく、段階的、近似的に高まりゆく循環的で発展的なダイナミズムの“モメント”そのものなのである。つまり

り、未知の事柄(法則性)に関して、それを探し出しつつ自然を変革すると共にそれを介して自己をも変革してゆくときに不可避的に伴う発展的モメントなのであり、さらなる客観的法則性の意識化とその意識的適用とは、近似的に段階をおって高まっていく循環的な無数の成功と失敗の契機が必ず媒介しているのである。

さらに、ここで注意すべきは、客観的法則性が「何らかの客観的法則性があり、これが目的を媒介しうる事をみとめさえすればよい」(「技術論」)ものとされている点である。これを見ると、或る目的を媒介しうるものとして丈、客観的法則性が認められ、目的そのものは客観的法則性には含まれ得ないかのような印象を受けるであろうが、実はそうではないと思われる。或る目的が実践に於て定立される時、その目的自体が、その実現を目指す実践に於て、一つの規定的に働く行動原理として法則性をもって機能するのであり、従って、かような意味での法則的目的の客観的妥当性の範囲と限界とが、当該の目的自体の妥当し得る“個有な適応領域”の範囲と限界として、実践の客観的結果を媒介しながら、客体(社会・歴史を含む自然)の方から実践主体につきつけられることになるのである。従って、当面の目的が、技術的実践に於いて、客観的法則性の裡に採り込まれつつ、客体によって鍛えられ、目的そのものをいわば、批判的に発展させていくと解されるのである。この時、「探究およびテストが進む過程で、目的が発展するような状況」(デューイ『哲学の改造』)も出現するのである。

さて、以上のこととを念頭に置きつつ、技術的実践に於る・実践結果(成功と失敗)のもつ位置と意味の問題に戻ろう。

実体としての主体の、実体としての客体への合目的的働きかけ(=自然力としての作用)は、目的を媒介しうる客観的法則性に正しく則れている限りでは成功をもたらし、正しく則れていない限りでは失敗をもたらす、と一應言い得る。しかも、実践において、客観的法則性に正しく則れている場合、その限りで、ここに、ザインとゾルレンとの分裂・対立の止揚が

生ずる。けだし、この場合に於る成功とは、客観的法則性を基盤どし、それに呆くまでも則しつつ(=客観的法則性の正しい意識的適用という、知的統御に基づいて)はじめて成り立つ技術的実践を意味しているからである。

ところで、技術的実践に於ては、主体（人間）から客体（自然）に働きかける「作用」(=客体への“問い合わせ”)に照応して、例えば、客観的法則性が正しく把めていない限りでの、その適用に於ける実践の“失敗”という形態を介して、客体（自然）から主体（人間）への、いわば、批判的な「反作用」(=客体からの“応答”)が必ず生ずる。しかし、かような客体自体からの批判的反作用は、主体による技術的実践を媒介とすることによって、またそれによってのみ出現可能なものなのである。が、兎も角も、このようにして客体自体からの「反作用」が存在し得るからこそ、その「反作用」的批判を、実践主体が誤魔化しなくありのままに受けとめてそれを意識することも成り立ちうことになるのである。そしてそれが、技術的実践に於てみられる・最も根源的な意味での・また最も原初的な意味に於る・結果を引き受ける“責任倫理”的立場なのだと言えるであろう。

この場合、技術的実践に於て認められる結果責任倫理とは、《客体からの批判的反作用として現象する結果を、主体がありのままに誤魔化しなく受けとめる》ということ以外のものではないのである。しかも、これは、道徳的・倫理的な人間相互の間に成り立つ次元の問題に還元され得るものでは決してなく、良し悪し以前に、自然そのものによって強いられ与えられている事柄の次元に属する・元々誤魔化しようのないものなのである。その誤魔化しようのないものを、ごまかさずありのままに根本的に受け容れる丈の話なのであり、自然必然的にそうなっていることをその通りにみとめる丈のこと(=客体のもつ必然性の洞察)にすぎない。とはいえ、そこには当然「否定的なものの厳しさ・痛み・忍耐・労苦」(Hegel『精神現象学』)が伴わざにはすまない。(註)しかし、如何にプリミティヴなものだとはいえ、主体にとっては、これこそが自由の獲得への道であり、まことの勇気

であり、真実の愛ではないのだろうか。その意味でも、かような客体からの反作用としての結果の批判的契機の介在なくしては、人間は実践に於ける・客観的法則性の意識化もそれの意識的適用も不可能となる他はなく、従って又、自己を含めた如何なる意味での自然をも変革すること（=世界の変革）は勿論のこと、人間が動物から人間になること（=人間の自己変革）自体が不可能となる、という点こそが重要なのである。従って、これは、いわゆる倫理以前の問題なのであり、自然に於ける人間の最も根源的な在り方——根源的受動性被規定性としての在り方 = 受苦的本質存在 *ein leidendes Wesen* (K. Marx『経済学=哲学草稿』) ——としてのもの故、むしろ、倫理の成立根拠とすら言い得るものであろう。これが、人間の技術的実践の論理構造自体の裡に、既に実践主体による結果責任倫理が、萌芽的に、しかも本質的に内在しているということの内実なのである。

さて、以上のことまとめると、——人間的成长・発達の媒介活動たる技術的実践自体の裡に於て本質的に認められ得る・萌芽的な・実践主体の結果責任倫理の契機は、なんら人間相互の倫理的実践関係にのみ限られるものではない。それは、むしろ後者の関係を含みつつそれを超えていると同時に、さらには、かような社会的倫理関係そのものを成り立たしめ、可能たらしめて来た生成基盤としてのものなのであり、《人間の・自然一般に対する本源的関係たる技術的実践そのものに於て見い出され得る本質的な契機》なのである。が、それは、技術的実践に伴う・客体からの批判的反作用としての結果の契機を全くまでも前提として、その上でのみ可能なものに他ならないのである。だとすれば、その意味では、客体から

(注)ところが、Hegel は主体を自己意識としたため、対象化は自己意識の外化であり、自己意識の外化が即ち、物性の指定であった (das absolute Wissen)。それ故、Hegel の場合、「否定的なものの厳しさ、痛み、etc.」とは言っても、決して(我々がここで主張しているような)自然そのものが拒否し強いるといった類の「否定的なものの厳しさ、痛み、etc.」ではなかった。

の批判的反作用としての実践結果こそが、人間の人間的成长・発達にとって、より根本的な契機だと言われなければならないであろう。とはいえ、主体に即していうならば、かような反作用的結果を、失敗なら失敗としてありのままに意識すること、それはまさに主体に於いてなされることなのである。この意味では、かのような客体的反作用たる実践結果の主体的受けとめのうえに成立しうる結果責任倫理は、その限りで、自然の自己発展としての人間が、より人間的となることを歴史的に可能たらしめて来た・技術的実践に於ける・本源的な意味での媒介的契機なのだと言えるであろう。

さて、ここに至って、我々は、技術的実践にとって本質的なメントたる『結果（責任）』を、今度は、より人間的に成長・発達するためのメントとして意識し、それを意識的に教育の部面に適用することができる事になるであろう。なぜなら、人間が人間になって来た・媒介活動としての技術的実践そのものの裡に於て、客体の批判的反作用たる実践結果を主体の責任として受けとめることが、如何に本質的で不可欠なメントであるかという『法則性』が意識された以上は、その法則性を（まさに技術の本質規定に則りつつ）、人間をより人間的たらしめんとする教育目的の為に、教育実践に於て意識的に適用してみることが許されるであろうからである。

先に、私は、人間実践に本質的な失敗の合理的位置づけ（=現実との媒体たる失敗を、人間的成长・発達にとっての変革的メントとして位置づけること）が、教育実践上、必要かつ重要なことを指摘しておいたのであった。その理拠も今既に示し終えた。ここに至って、我々は、教育実践を、上記の如き、《失敗の合理的位置づけ》に基づきつつ、本質的に把握し、それを提示する必要に迫られることになるであろうし、又それが事実、可能ともなるであろう。

即ち、――

教育実践とは、人々、子供に具っている『失敗からも、学ぶ姿勢』(注1)に基づきつつ、子供が自分の失敗(注2)を、より人間的に成長・発達するための、否定的に高まる変革的モメントとして意識的に摑み克服してゆくことに協力することを介して、子供自身が、かの『姿勢』をより鍛え育んでゆくこと、を目指す人間的実践(注3)である。

(注1) 『失敗からも学ぶ姿勢』とは、当然『成功から学ぶ』姿勢を含むことが前提されている表現なのである。それ故、上の本質的規定に於ては、成功から学ぶケースが既に論理的に含意されていると解されたい。

(注2) 失敗は、(人間的成长・発達を媒介する活動としての) 技術的実践によって可能となる。

(注3) 人間的実践とは、技術的実践を意味する。

さて、これまで、我々は、進歩のダイナミズムに於て ^{フォルム}型 の果す反機能について検討を加えつつ、人間的成长・発達は如何にして可能か、という問題を、それらを媒介し可能にする原理に關連して考察して來た。

しかし、今度は、進歩のダイナミズムに於て ^{フォルム}型 の果す機能的な側面について触れておくことにしよう。

そこで、次に、型 (Form) のもつ機能に関しては、フォルムがそのフォルムを生み出して來た個人的並びに社会的な歴史的生成運動のダイナミズムに則しつつ実践的に把握される場合には、——これは当の型を生み出した“形成力”をその形成のプロセスに於いて摑むことであるが、——それが形成力の本質的把握となる為には、我々は、さらに当の形成力の本質態たる“革命的力” (=所与のフォルムを乗り超え、揚棄して、さらなる新たなフォルムの形成へと向かう力) へのコミットへとつき進むのでなければならないし、事実、所与の ^{フォルム}型 を“否定的に高まる為の変革的モメント”たらしめることを介して、かの“力”へのコミットへとつき進め得るのである。言い換るならば、所与の ^{フォルム}型 は、それを責極的側面から見る時、その型を否定しつつより高まる際の“媒介的契機”たり得るといえる。

ところで、この場合、^{フォルム}型 をその形成のプロセスに於いて摑むとは、所

進歩概念の論理的検討：進歩と退歩

与の型を介して本質たる“形成力”に迫り、さらにこの本質(=形成力)の本質態たる“革命的力”を摑むことなのであるが、さらに“革命的力”を本質的に摑むとは、 “革命的力”に自分自身が全身的に(実践的に)コミットすることを媒介しながら、その“革命的力”を彼自身が新たな局面と条件に於いて、新しく現象させる (=所与の型^{フォルム}を揚棄して、新たな型の形成へと至る)ことに外ならないのである。なぜならば、或る型^{フォルム}の形成力とは、純粹に形成力そのものとして、機能的に文存在し得るものでは決してなく、必ずや所与の型^{フォルム}に對峙し、それを否定して乗り越えてゆく革命(=所与の型^{フォルム}の変革運動)としてのみ実在的形成力たり得るものだからである。Hegel が「Form 自体が Wesen にとって本質的なものである」と述べているのは、かような意味合いに於ても理解される必要があるであろう。だからこそ、又、Hegel にとって Bildung とは、“Herausarbeiten aus der Unmittelbarkeit des substantiellen Lebens”, (“Phänomenologie des Geistes”) を意味するものでもあったのである。

従って、本質的な意味での形成力とは、所与の型^{フォルム}との緊張的対立を伴いつつ、否定的に高まり超える変革運動としてのみ現存し得るのである以上は、“革命力”なのであり、革命力として形成力をとらえる時にのみ、形成力は真に (in Wirklichkeit) 形成的な力をもつに至るのである。

さて、これまで、進歩のダイナミズムにとっての型のもつ意味を、機能と反機能の面から考察して來たのであったが、ここで最後に、進歩と退歩について簡単にまとめておきたい。

進歩のダイナミズムにとって、型の形成は不可欠な本質をなすものである。ところが、型はそれが一度形成されるや、既に述べた如き反機能を有する。その意味に於ては、進歩は退歩をその原理自体の裡に本質的に孕んでいる運動であると言えよう。そして、その限りに於ては、退歩は進歩にとって必然的なのである。とはいえ、上で触れておいた様に、このこと

は、その相対的な退歩を避けることが出来ず、手を打つことが不可能であるということを決して意味するものではないのである。その意味では、相対的退歩は進歩にとって不可避的ではないと言えよう。

であるとすれば、進歩の概念分析自体に於ても、これまでの進歩観に対して上のような処理ができるはずであろう。つまり、『いわゆる進歩』に対して、『本来的進歩』を提示することができるのではないだろうか。これまでの『いわゆる進歩』とは、相対的退歩に基きつつ進歩であり、相対的退歩を許容し放任しつつの上での進歩であり、疎外された進歩であったのではあるまいか。これは弁証法を意識せず、従って自然や歴史の弁証法性に流されて来て進んで来た進歩の歴史であった故の進歩観であり、進歩の概念分析である。それに対して、相対的退歩を自覚し、それに対する手を打ちつつ進歩たる『本来的進歩』が在り得るであろう。その為には、大袈裟に言うならば、永遠の『闘い』^{フォルム}が不可欠であろう。即ち、個人でも、組織でも、社会でも、それぞれの局面とレヴェルに於いて、『型』との不可避的な関連性に基づく・墮落・欺瞞との不断の闘いが要求されることになるだろう。のみならず、より責極的には、不断の自己否定運動の中に身を置くことが必要となるであろう。その意味では、不断の変革、革命を生きることになるだろう。だが、革命とは何も社会体制にのみ限りはないし、実は革命すらがフォルム化することによって革命の対象に転化しうるのである。従って、この運動は、自然の弁証法性に流されることへの闘いだという意味において、弁証法の意識的適用による、不斷に新たな、否定と揚棄への努力の運動であるだろう。